

第1回 マリンバイオテクノロジー若手の会の討論会(合宿形)

モリ テツシ(東京農工大学)、新家 弘也(関東大学院大学)

若手の会の設立から4年が経ち、今まで年2回、学会大会内でのシンポジウム(春)および若手の会のシンポジウム(秋)を主催し活動してきた。しかし、これらのシンポジウムでは、若手研究者(PD、研究員、助教など)の交流が主となっており、若い世代、学部、修士および博士の学生の交流チャンスが少ないことが課題となっていた。そこで、この若い世代の層の交流の機会を増やし活性化させることを目的に、若手の会では学生を中心とした合宿形式の討論会を企画・実施した。



写真1：集合写真(教員4名、学生7名)

本討論会は1泊2日の日程で東京農工大学の合宿施設(ACADEMY HOUSE TATEYAMA、千葉県館山市)で行い、東京農工大学(教員1名、学生2名)、関東大学院大学(教員1名、学生3名)および東京海洋大学(学生2名)から教員および学生が参加した。参加した学生は学部生6名、修士1名であった。また、特別講演の講演者として糸井史朗先生(日本大学)および志村遥平先生(筑波大学)に参加して頂いた。初日のプログラムは、糸井先生の講演から始め、「フグは毒をどこから獲得し何に使うのか」との演題で、これまでの研究成果をもとに熱く講演して頂いた。続いて、参加した学生が各自の研究内容について口頭で発表し、最後に、志村先生に「シアノバクテリア類の全ゲノム決定によるゲノム比較および二次代謝産物合成遺伝子の解析」との演題でシアノバクテリアをモデルとしたバクテリアのゲノム決定からバクテリア間のゲノム比較解析までの流れについて丁寧に講演して頂いた。特別講演や各学生の発表においては、参加した学生から多くの質問があり、活発な議論が行われる等、学生の積極性が見られた。また本討論会では、研究テーマを指定しなかったため、微生物から魚類までの多分野にわたる研究内容が発表され、参加者の方々にとって、とても良い勉強の機会になった。発表および講演会のセッションの終了後、教員および学生同士の関係をより深めるため、施設内で懇親会も行った。2日目には、研究現場を身近に体験するために、館山市にある東京海洋大学の水圏科学フィールド教育研究センター館山ステーション、矢澤良輔先生(東京海洋大学)の案内により吉崎悟朗先生(東京海洋大学)の不妊魚の代理親魚技法で作成された魚の飼育施設などのツアーに参加した。参加した学

生および教員からは現場での研究の難しさに圧倒され、特に学生にとっては現場を見学できる数少ない機会であったため、高い関心が持たれた。

このように 2 日間にわたり討論会・見学会が行われ、他大学そして異分野の学生同士が集まることで、互いに学ぶことが多く、そして新たな仲間を増やすこともできた。参加した数名の学生からのコメントは下記の「学生の声」でまとめた。初めて開催した本討論会は成功したと考えており、今後も参加者の増員を図るとともに、若い世代が交流できる場を提供していきたい。



写真 2：特別講演および学生の口頭発表の様子

「学生の声」

“本討論会は、私にとって、異分野の研究者や学生と深く交流する初めての機会となった。これまでに学会等へ参加した際には、分野が近い人とばかり関わりを持つことが多かったために、今回のような分野の異なる研究者と関わるができる機会は大変貴重なものであった。実際に、異分野の研究者の方々の着眼点は、私たちとは異なっていることも多く、新たな視点で自らの研究を考えるよいきっかけとなった。また、他分野の研究を知ること、現在注目されている研究や技術について包括的に知ることができた。他分野では当たり前知られているような技術であっても、自身の研究分野にしか注目していないと知ることができない場合も多い。このような他分野の技術を取り入れることで、自らの研究をより前進させ、独創的なものへと発展させることができるのではないかと感じた。本討論会では、異分野の研究者、学生が集まる場でありながらも、海を舞台とした生物学という共通した領域を扱っている。そのため、研究分野および研究対象は異なっていながらも、中身の濃い議論を交わすことが可能であった。また、懇親会等で親睦を深めるだけでなく、互いに自らの研究を発表し、議論することで多くの発見を得ることができた。このような機会が今後もあれば積極的に参加してみたいと思う。”（東京海洋大学、修士 1 年生）

“私のような研究内容を発表できる場の限られた学部生にとって、本討論会は貴重な機会となり、改めて自分の研究を見つめ直す契機になった。また、本討論会に参加していた他大学の研究施設を見学し、様々な驚きを感じると共に、マリンバイオテクノロジーの研究がより

身近なものに感じられるようになった。”（東京農工大学、学部4年生）

“普段研究内容を発表する機会は少なく、本討論会では初めての口頭発表だった。そのため、人に伝えることの難しさや自分の研究を見つめ直す良い機会になった。また、同じ海に関する研究であっても、自分の研究とかけ離れた内容も多く、幅広い分野を学んだ。他大学の研究施設の見学では、魚の研究ならではの設備や技術の難しさに刺激を受け、自分の研究に対してのモチベーションも上がった。私のような学部生にとって、学会などで他大学の学生や研究者と関わることは非常にハードルが高く感じるので、このような交流会はとても貴重だった。”（関東学院大学、学部4年生）